土左日記　附いほぬし

イ曾 4
600
167

三百三

土佐の記
いふ姫し

門 イ 曽
號 600
巻 167
特

群書類従巻第三百三

検校保己一集

紀行一

土左日記　　　　木工權頭貫之

をとこもすなる日記といふものをゝむなもしてみ
んとてするなりそれのとしのしはすのはつかあまり
ひとひのひのいぬのときにかどですそのよしいさゝかもの
にかきつくあるひとあがたのよとせいつとせはてゝれ
いのことゞもみなしをへてげゆ(解由)などとりてすむたち
よりいでゝふねにのるべきところへわたるかれこれ

しりしらぬおくりすとしころよくくらへつる人〻なむ
わかれかたくおもひてその日しきりにとかくし
つゝのゝしるうちによふけぬ
廿二日にいつみの国まてとたいらかにねかひたつ
ふちはらのときさねふなちなれとむまのはなむけす
かみなかしもゑひあきていとあやしくしほ
うみのほとりにてあされあへり
廿三日やきのやすのりといふ人ありこの国にかならす
しもいひつかふものにもあらさなりこれそたゝはしきやうにて
むまのはなむけしたるかみから

にやあらむくに人のこゝろのつねとしていまはとて見
えさなるを心あるものははちすになむきけるこれは
ものによりてほむるにしもあらす
廿四日講師むまのはなむけしにいてませりありとある
かみしもわらはまてゑひしれて一文字をたにしらぬ
ものしかあしは十文字にふみてそあそふ
廿五日かみのたちよりよひにふみもてきたなり
よはれていたりて日ひとひよひとよとかくあそふやう
にてあけにけり
廿六日なほかみのたちにてあるしのゝしりてらうとう

まてに物かつけたりからうたこゑあけていひけり
やまとうたあるしもまらうともこと人もいひあへり
けりからうたハこれにえかゝすやまとうたあるしのかみの
よめりける歌

みやこいてゝきみにあはんとこしものをこしかひ
もなくわかれぬるかなとなんありけれハかへるさきの
かみのよめりける歌

しろたへのなみちをとほくゆきかひてわれにゝへきはたれ
ならなくにこと人〳〵のもありけれとさかしきもなかる
へしとかくいひてさきのかみ[illegible]

いまのももろともにおりていまのあるしもさきのもて
とりかハしてゑひことにこゝろよけなることしていて
いりにけり
廿七日おほつよりうらとをさしてこきいつかくある
うちに京にてうまれたりしをんなこくにゝてにはか
にうせにしかハこのころのいてたちいそきをみれと
なにこともいはす京へかへるにをんなこのなきのみそ
かなしひこふるある人〳〵もえたへすこの
あひたにある人のかきていたせるうた

みやこへとおもふをもののかなしきはかへらぬ人の

あはれハなりきるも悔しあまりここになは
ゆる物とはすまつ了つ者後なき人とはつるなき
まふうるをしかり帰るとはる名るあひ見すかこのさ
絶といふとそ後よかとみそかし悔しまと人きは
うれさけなふともて相ひをくは不む相りぬて別
かくろ絶えみをいふのまれあらぬ人くれ昔ふにまの
きつるひとくそんあるやうまい侍りはあの忽く
来るまわのまはくくいひくかれ人このくちあき意
申後りらにくこれうみへよてよなひいくせうまき
まうと思ひふ人やと思るとあしうちもよるうらハむまそ

さそのと後ハまた文をれとかゝ為てあり名まいはいとけらく
絶えて極く人のよありけ
ましさせてそらひもきてぬまつまれなまさんを
きみよみけれといふあいたふかちよりまたもあてくれ
まゐりて物のまへしきけをくるひはまいにやくいをん
とてまゐみちぬかせをかへぬ毎しやきのまはふは
りのうをんとこまれ物のよはるひとくれわしは
川をくかくうとると後ふ世わへいまいふ文ある
人ふしく不昔まとかひくいふうくうふよう
なやくにあちかも此るも極し極く更まも返まよひぬとを

いふこよひうらとにとまるふちはらのときさね
たちはなのすゑひらこと人〳〵おひきたり
廿八日うらとよりこきいてゝおほみなとをおふこの
あひたにはやくのかみのこやまくちのちみね
さけよき物ともゝてきてふねにいれたりゆく〳〵
のみくふ
廿九日おほみなとにとまれりくすしふりはへてとう
そ白散さけくはへてもてきたりこゝろさしあるに
にたり
元日なほおなしとまりなり白散をあるものよのまとて
舟やかたにさしはさめりけれは風にふき
ならさせて海にいれてえのますなりぬいもしあら
めもはかためもなしかやうのものなきくになり
もとめしもおかすたゝおしあゆのくちをのみそすふ
このすふ人〳〵のくちをおしあゆもしおもふやうあ
らんやけふはみやこのみそおもひやらるゝこへのかと
のしりくへなはのなよしのかしらひゝらきいかに
そとそいひあへなる
二日なほおほみなとにとまれり講師ものさけおこせ
たり

三日おなじところなり風なみのしばしとおし
むこゝろやあらんこゝろもとなし
四日風ふけばえいでたゝずまさつらさけよきもの
たてまつれりこのかうやうに物もてくる人になほ
しもえあらでいさゝけわざせさすものもなしにぎ
はゝしきやうなれどまくるこゝちす
五日かぜなみやまねばなほおなじところにあり人々
たえずとぶらひにく
六日きのふのごとし
七日になりぬおなじみなとにありけふはあをむまをお
もへどかひなしたゞなみのしろきのみぞみゆるかゝる
あひだに人の家（池イ）のいけとなあるところよりこひは
なくてふなよりはじめてかはのもうみのもこと物ども
ながひつにになひつゞけておこせたりわかなぞけふを
ばしらせたるうたありそのうた
あさぢふの野べにしあればみづもなきいけにつみつる
わかなゝりけりいとをかしかしこのいけといふはところ
の名なりよき人のおとこにつきてくだりてすみける
なりこのながひつのものはみな人わらはまでにくれ
たればあきみちてふなこどもははらつゞみをうちて

海をさへおし縫して浪そこの底しかくてこれあひ
あふことおほかりきふかくこめかせてききける人その家
とそやは海おもひいてんあの人うらみんとおもふに
縫あはせて家のうちにとくはらくさはあんなのまへ河な
家にとこうまへいりひとくよあるらう

拾くさ縫よあつさくさこれ縫よのをとられて家
んりまもやまほしむと拾よあ家にとおほ書なるん
しとてさう物らまらるはゆくあらんとあらこと書れ
かまとあつまりの拾とをひとりをえくしせはさうくさ人
意海しまつくとさ縫をのされあつの物をとのさくひて
稼みけぬさのうさぬしさん海とまつらはとはひてあ
ちぬあらん人のこれおちくはさる花うのふはふ海なさのう
さのへしせんとはふゝとところさそはとおもしこさと
されよるんさくむやはよみけてくいたやいえうしとはふまう
られとてこちぬる人はあちてら海んとそすまあけ
家は稼みけぬとまやあのらんやそはよくくりさを
拾らもはうらよん海のとはふかしうてさふこのほうそ
さはうふはちてはゆとさゐてさへはらへ家らうし
拾く人もと海るもそて此なるさ川さまはのさ
ぬまと海さりられせとなんらぬるかくはふまのうち流

くしけれはにやあらんいとおもはすなりわらはこと
にてはなにかはせんおんなおきなにおしつへし
あしくもあれいかにもあれたよりあらはやらんとて
をかれぬめり
八日さはることありてなほおなしところなりこよ
ひ月は海にそいるこれを見てなりひらのきみの
山のはにけていれすもあらなんといふうたなんおもほゆる
もし海へにてよまましかは波たちさへていれ
すもあらなんともよみてましやいまこの歌をおも
ひいてゝある人のよめりける

後撰
てる月のなかるゝ見れはあまの川いつるみなとは
うみにさ（そあイ）りけるとや

九日のつとめておほみなとよりなはのとまりをおはんと
てこきいてけりこれかれたかひにくにのさかひの
うちはとて見おくりにくる人あまたかなかにふちはら
のときさねたちはなのすゑひらはせへのゆきまさ
らなんみたちよりいてたうひし日よりこゝかしこに
おひくるこの人々そこゝろさしある人なりけるこの人
ひとのふかきこゝろさしはこの海にもおとらさるへし
これよりいまはこきはなれてゆく

らんとてそこの人〻ハおひきけるかくてこきゆく
まに〳〵海のほとりにとまれる人もとほくなり
ぬ舟の人も見えすなりぬきしにもいふ事あるへ
し船にもおもふことあれとかひなしかゝれとこの
哥をひとりことにしてやみぬ

おもひやる心ハうみをわたれともふみしなけれハ
しらすやあるらんかくて宇多の松はらをゆきすく
く其松のかすいくそはくいくちとせへたりと
しらす本ことに波うちよせ枝ことにつるそとひ
かよふおもしろしと見るにたへすしてふな人の
よめるうた

みわたせハまつのうれことにすむつるハちよのとちと
そおもふへらなるとやこのうたハところを見るにえ
まさらすかくあるを見つゝこきゆくまに〳〵山も
海もみなくれよふけてにしひんかしも見えすし
てゝけ（天氣）のことかちとりの心にまかせつをのこもな
らハぬハいとも心ほそしましてをんなハふなそ
こにかしらをつきあてゝねをのみそなくかくおもへ
ハふなこかちとりハふなうたうたひてなにともおもへ
らすそのうたふうたハ春の野にてそねをハ

なくわかすゝきにてきるくつんたるなを
おやゝまほるらんしうとめやくふらんかへらやよ
んへのうなゐもかなせに（銭）こはんそらことを
をしておきのりわさをしてせにももてこすおの
れたにこすこれならすおほかれとかゝす（イ先）これ
を人のわらふをきゝてうみはあるれとも心はすこし
なきぬかくゆきくらしてとまりにいたりておきな
ひとりたうめひとりあるかなかにこゝちあしみ
（みイ）して物もものしたはてひそまりぬ
十日けふはこのなはのとまりにとまりぬ

十一日あかつきに船をいたしてむろつをおふ人みなまた
ねたれは海のありやうも見えすたゝ月を
見てそにしひんかしをはしりけるかゝるあひたにみな
よあけて手あらひれいのことゝもしてひるになり
ぬいまはしはねといふところにきぬわかきわらはこの
ところの名をきゝてはねといふところは鳥のはねのやう
にやあるといふまたをさなきわらはのことなれは
ひとくわらふときにありける女わらはなんこのうた
をよめる
まことにて名にきくところはねならはとふかことくに

ことくにみやこへもかなとそいへる
いかてとく京へもかなと思ふこゝろあれは
このうたよしとにはあらねとけにとおもひてひと〳〵わすれす
このはねといふ所とふわらはのついてにそまた
むかしへ人をおもひいてゝいつれの時にかわする
けふはましてはゝのかなしからるゝことはくたりし
時の人のかすたらねはふるうたにかすはたらてそ
かへるへらなるといふことをおもひいてゝ人のよめる
世中におもひやれともこをこふるおもひにまさる
おもひなきかなといひつゝなん

十二日あめふらすふんときこれもちかふねのおく
れたりしならしつよりむろつにきぬ
十三日のあかつきにいさゝかにあめふるしはしありてや
みぬ女これかれゆあみなとせんとてあたりのよろ
しき所におりてゆく海を見やれは
くもゝみな浪とそ見ゆるあまもかないつれか海と
とひてしるへくとなむうたよめるさてとをかあ
まりなれは月おもしろしふねにのりはしめし
日よりふねにはくれなゐこくよききぬきすそ
れはうみのかみにおちてといひてなにのあしかを

によしとつけてほやのつまのいすしすしあは
ひをそこゝろにもあらぬはきにあけて見せ
ける
十四日あかつきより雨ふれはおなしところ
にとまれり舟きみせちみす（節忌）さうし（精進）物なけれ
はむまときよりのちにかちとりのきのふつりたりし
たひにせになけれはよねをとりかけておち（解）られぬ
かゝることなほありぬかちとり又たひもてき
たりよねさけしはしはくかちとりけしき
あしからす

十五日けふあつきかゆ（小豆粥）にすくちをしくなほ日
のあしけれはゐさるほとにそけふはつかあま
りへぬるいたつらに日をふれは人々海をなか
めつゝそあるめのわらはのいへる
たてはたつゐれは又ゐるふく風となみとは
おもふとちにやあるらんいふかひなきものゝ
いへるにはいとにつかはし
十六日風なみやまねはなほおなしところにとまれ
りたゝ海になみなくしていつしかみさきといふところ
わたらんとのみなんおもふ風なみともにやむへく

もあらずある人のこのなみたつを見てよめる哥
しもだにもおかぬかたぞといふなれとなみの
なかには雪ぞふりけるさて舟にのりし日よりけふ
までにはつかあまりいつかになりにけり
十七日くもれる雲なくなりてあかつきづくよいと
おもしろければ船を出してこぎゆくこ
のあひだに雲のうへも海のそこもおなじごとく
になんありけるむべも昔のをとこはさをは
うがつ波のうへの月を舟はおそふ海のうち
のそらをとはいひけんきゝざれにきけるな

りまたある人のよめる哥
みなそこの月のうへよりこぐ舟のさほにさは
るはかつらなるらしこれをきゝてある人のまた
よめる
かげみれば波のそこなるひさかたのそらこぎ
わたるわれぞわびしきかくいふあひだに夜やうやく
あけゆくにかぢとりらくろき雲にはかにいできぬ
風ふきぬべしみふねかへしてんといひて
ふねかへるこのあひだに雨ふりぬいとわびし
十八日なほおなじ所にあり海あらければ

殊にたえかくこそと雨のふりしく見ゆ道ともちらくさ
絶ともいとおほしろうく道ともうろしき絶え
なふことをもおもなへひとゝとらハ心あつりや
あらんかうゝふとりふへし殊をいさそれき
つらなきハあるひとのよめる
いたうふりのおすろいそよハらし清さを伊勢とも
わゝぬ雪のそそふることの哥え清のせぬひとのごと如
ありまさ人のよめる
風まよう雪のいそよハうくひとゝも書もえし
らぬ花のそそ咲くこの哥ともやとすゝしぶらくと

さてふ絲のやとさしけの雨かれ清さてこのまく
清しさ心やまよめる
西行法師を桜さう花のとふくかせそよせつてひを
とけう西へうかることねかうことをも人のあふのを
いふとある人の文さて前宝りてゐ給ふるその前
よあるをしみそもあさあうてを人にふえあ
らそいらしふやうあゝうこめしいと宝しきけし
くそ思ひま絲へとも云ま絲のきわりとも
ええよきあ思ふことるへしらぬてまいひゆくしま
してみちまハいつなのらん

十九日ひあしけれはふねいたさす
廿日きのふのやうなれは船いたさすみなひと
〳〵うれへなけくくるしく心もとなけれはたゝ
日のへぬるかすをけふいくかはつかみそかとかそふれは
およひ（指）もそこなはれぬへしいとわひしよるは
いもねすはつかのよの月いてにけりやまのはも
なくて海のなかよりそいてくるかうやうなるを
見てやむかしあへのなかまろといひける人は
もろこしにわたりてかへりきける時に船にのるへき
ところにてかのくにひとむまのはなむけしわかれ
をしみてかしこのからしつくりなとしけるあ
かすやありけむはつかの夜の月いつるまてそあり
けるその月は海よりそ出けるこれを見てそ仲
まろのぬしわかくにゝかゝるうたをなん神
代より神もよんたひいまはかみなかしもの人
もかうやうにわかれをしみよろこひもあり
かなしひもある時にはよむとてよめりける歌
あをうなはらふりさけ見れはかすかなるみかさの
山にいてし月かもとそよめりけるかのくに人
きゝしるましくおもほえたれともことの心を

おとこもしにさまをかきいだしてこゝのことはつた
へたる人にいひしらせければ心をやきゝえたり
けんいとおもひのほかになむめでけるもろこし
とこの國とはことことなるものなれど月の影
はおなじことなるべければ人の心もおなじこと
にやあらんさていまそのかみをおもひやりて
ある人のよめるうた

後撰
みやこにてやまのはにみし月なれど
なみよりいでゝなみにこそいれ（うと集）

廿一日うのときばかりにふねいだすみな人〴〵のふね
いづこれを見れば春のうみに秋のこの葉しも
ちれるやうにぞありけるおぼろけのねがひによ
りてにやあらん風もふかずよき日いできて
こぎゆくこのあひだにつかはれんとてつきて
くるわらはありそれがうたふふなうたなほこそ
くにのかたはみやらるれわがちゝはゝありとし
おもへばかへらやとうたふぞあはれなるかくうたふを
きゝつゝこぎくるにくろとりといふ鳥いはのうへ
にあつまりをりそのいはのもとになみしろくうちよす
かぢとりのいふやうくろ鳥のもとにしろきなみを

すみとよみし世のなかにこれもむらさきのゆかりとおもはすもを純
とも物いふやうにてそらにきこゆる人の様にあかく孫ハ
いかなる世の人のひかりハ様くも旅かところのある人
あまたの人ちく國よりつとめてかはらくむくひせんと
いふ者の事をおもふ人へは海のほとりにおきて旅し
まつ旅ハ物しらさる人のこゝろねたゝしくそらやさき
ちハらみにあつこまり旅なりけり
わかれ行はゆきとりのへのこゝろありかたしといつまて海さ
旅のならひもさりたりと物ちらさまいへり
廿二日より雨降とは海のほとりのさしと海のほとゝおもひて

越ゆくみちかよ山見え旅としかれけるをあまたの
はるハ見ゆるはあさきれくてあるこ旅よりハ船ハ旅
て海よく山をはなくて見ゆるとみちくあやし
きさて哥とそなむ
山路て旅くの様まて見え道はあしくひき山きえ
ゆく旅まいハきてすゝやとそいへるよきれさかりえ
めしよてはなつかしく海あしく家まてこそいふ
あらたのおなこ花さけりあるひとのよある
たまみのとひとへにさけといふ旅見えけハ様さと
たつねにかなひけるかな

廿三日ひてりてくもりぬこのわたりかいそくのおそ
れありといへは神仏をいのる
廿四日きのふのおなしところなり
廿五日かちとりらのきた風あしといへはふねいたさす
かいそくおひくといふ事たえすきこゆ
廿六日まことにやあらんかいそくおふといへは夜なか
はかりよりふねをいたしてこきくる道にたむけするとこ
ろありかちとりしてぬさたいまつらするに
ぬさのひんかしへちれはかちとりの申してたてまつる
ことはこのぬさのちるかたにみふねすみやかにこかしめたまへ
と申してたてまつるこれをき
きてあるめのわらはのよめる
わたつみのちふりの神にたむけするぬさのおひ
風やますふかなんとそよめるこのあひたに風のよけれは
かちとりいたくほこりてふねにほあけなとよろこふ
そのおとをきゝてわらはもおむなもいつしかとしおも
へはにやあらんいたくよろこふこのなかにあはちの
たうめといふ人のよめるうた
おひかせのふきぬるときはゆくふねのほてうちてこ
そうれしかりけれとそてけのことにつけつゝいのる

廿七日かせふきなみあらけれは船いたさすこれかれ
かしこくなけくおとこたちの心なくさめにから
うたに日をのそめは宮こ遠しなといふなるこ
とのさまをきゝてある女のよめる哥
日をたにもあま雲ちかくみるものを宮こへと思ふ
みちのはるけさ またある人のよめる
ふく風のたえぬかきりしたちくれはなみちはいと
ゝはるけかりけり 日ひとひかせやますつまはしき
して寝ぬ

廿八日夜もすから雨やますけさも

廿九日ふねいたしてゆく うらうらとてりてこきゆく
つめのいと長くなりにたるを見て日をかそふれは
けふは子の日なりけれはきらす む月なれは京
の子の日の事いひいてゝこまつもかなといへと海な
かなれはかたしかし ある女のかきていたせる哥
おほつかなけふは子の日かあまならはうみまつをた
にひかましものを といふ うみにて子の日のうた
にてはいかゝあらん またある人のよめるうた
けふなれとわかなもつます春日野のわかこきわたる
うらになけれは かくいひつゝこきゆく おもしろき

しろきところにふねをよせてこゝやいつことゝひ
けれはとさのとまりといひけりむかしとさといひける
所にすみける女この舟にましれりけりそれかいひ
けらくむかししはしありし所のなたくひにそあ
なるあはれといひてよめる哥

としころをすみし所の名にしおへはきよる
なみをもあはれとそみるとそいへる

卅日あめかせふかすかいそくはよるあるきせさなり
とききて夜中はかりにふねをいたしてあはのみと
をわたる夜中なれはにしひかしもみえすおとこを
んなからく神仏をいのりてこのみなとを
わたりぬとらうの時はかりにぬしまといふ所をすき
てたな河といふ所をわたるからくいそきて
いつみのなたといふ所にいたりぬけふ海になみに
にたる物なし神仏のめくみかうふれるに
にたりけふ舟にのりし日よりかそふれはみそ
かあまり九日に成にけりいまはいつみの
くにゝきぬれはかいそくものならす

二月一日あしたのまあめふるむまときはかりにやみ
ぬれはいつみのなたといふ所よりいてゝこきゆ

く海のうへきのふのやうに風なみみえすくろさ
きの松はらをへてゆくところの名はくろく松の色
はあをくいそのなみは雪のことくにかひのいろはす
はうに五色にいまひといろそたらぬこのあひ
たにけふははこの浦といふ所よりつなてひきてゆ
くかくゆくあひたにある人のよめる哥
玉くしけはこのうらなみたゝぬ日はうみを
かゝみとたれかみさらんまたふなきみのいはくこの
月まてなりぬることゝなけきてくるしきにたへす
して人もいふこととて心やりにいへる

ひく船のつなてのなかき春の日をよそかいか
まてわれはへにけりきく人のおもへるやうなそ
たゝことなるとひそかにいふへしふなきみのからくひ
ねりいたしてよしと思へることをゑしもこそしたへとて
つゝめきてやみぬにはかに風なみたかけ
れはとゝまりぬ
二日雨風やます日ひとひよもすから神仏をいのる
三日うみのうへきのふのやうなれは舟いたさす風のふくこと
やまねはきしのなみたちかへるこれにつけても
よめるうた

さらずとてもひさしさもめぐりおちけりかなしきかな
玉緒絶なば絶なかりけりてもふ輩ぬ
四日目のちぎりのふかせ露にまさりけれのこあし東
によりて祝ひさしき玉の緒ながらへば孫を手よ沼
の契りあだなる露のかぎりは日をもえぬるぬるかぬな
かひにおとおもりのみまはそむきしみえ人とのを
恋川しら孫なる人のよめる
しずかなる時もよせてもわかちぬ人はすまか
忍おもひて日かげんといへ達は夢なる人めあへてそく

高孫の心歌のよしみえ面
和歌まつの四日後めしまなしまてまをきたきと
あかるとかうてて和をかいとおんいつるをんなのこいまを
ゑんすいおやをきれくなるのぬへし玉なるすもあり
くんとと人いえんやまるしともまつてとのかなやりきさ
やいふやうをあめの程おもひしまるよ日をよるまを
をなるきてゆきるんあれくあるらうし
てるとひてさむ体をましぬいつるみそくむとはな
しに日は定めまつる
五日まつふかくしていつまれなるこのその川のよ面の

さてこそ松かくらめをはかなく成りて後くるしまれ
くるしめらるゝと
松風と申す浅ゆきやうまぬは心をかうむりとり
うらやましき此松原のくもひはくるそとに姫孫
もくしけひのふ絶よとりくるかせはからうかふこと
常はいちくさの孫よりおわをうふなりあさ知る
めのとくしぬさきは行すてをやと絵けといふと此者を
紫式部とかやまうしはうち思ひの書きのへうらうを
さかの物語をまはうつてまわまうしぬ此やうなる
さとのそのもあるらんきく人のあやしくうきを
めさきをひつるかなとて絶ぬさせまいは有ふみを
もしあまりなのこゝもこゝにくふせうなうて人くく
玉孫のもとふいのつましあまりて風のこゝろまち
いよしかをめむまかぬくあるふ思ひ孫あいなの京の
ちかはくよかきひのあまりのようかゝいのもゝめる寄
いのまくおりうき海とるふとあやなくとのを蚊さ
へうふ昔ことにみ様つるん思ひひてゆくあひなかいし
須とふ所の松原物ゝし詠きて人あ人と浅し
まいらすとよし此わうつをたきさ行あらん此まあるき
ゆかしくそつと身をといふおもふうめるすき須このの松かり

さ紀よりは縁ハ歌よりきこえむしけひとつのえる
詠をひゆる附をいふすき縁なくいふなり
すみの江にふねさしよせよわすれくさしるし
ありやとつみてゆくへくとなんうつたへにわ
すれなんとにはあらて恋しき心ちしはし
やすめて又もこふるちからにせんとなるへしかく
いひてなかめつゝくるあひたにゆくりなく風の吹
ぬさてこけともこけともしりへしそきにしそきて
ほとほとしくうちはめつへしかちとりのいは
くこの住吉の明神ハれいの神そかしほしきもの

そおはすらんとハいまめくものかさてぬさたい
てまつりたまへといふにしたかひてぬさたいまつる
かくたいまつれともはら風やまていやふ
きにいやたちに風なみのあやうけれはかちとり
またいはくぬさにはみ心のいかねはみふねも行ぬ
なりなほうれしとおもひたふへきものたいまつり
たへといふにいふにしたかひていかゝはせんとて
まなこもこそふたつあれたゝひとつあるかゝみを
たいまつるとて海にうちはめつれはいとくちをし
されはうちつけに海はかゝみのおもてのことなりぬれはある

ひとりよめの哥
ちはやふる神の出給のあまてらす大神よりこそと道
てら川とはかられいてすゝしきえまぬきゝき
の姫君かと思ふうみまいあくしめてうつく
うら見ぬ神のあつるとこそいへりまかちきり代心
きかの法をみん家の父母
六日ニとつくし法をとりあいてかふたよつきてく
かくさうよりいらに人にとんかおきされ神をひまてと
あてゝよりをふ事よて河なしの法にあふ夢乃
詠くちをし風のおやいこみやおちくまゆ姫とふ

とよりちそは姫かさことあかしらをたけてかくそ
いへるか
いはしきそはをうつる難波のこ河きさおけて
みよとさふくりいるとおもひみえぬるの人のいく道
よくしも歩しうち道かなくまよりちきやむよう
これみゆあくめてま名の恵いしあそく梨しみのほ
ふくみとまあまかなといひぬる
七日ぬふか八ちつより船いりたらて出さ乃なりに川
の水ひそくなやときつくふ本緑乃くなりこと以とき
あしかるあひてよよるゝこさゝ代殿ちとくる里

こはくし船人まとかうやうの事さらにしらさ
けりかゝれともあはちのたうめのうたにめてゝみ
やこほこりにもやあらんからくしてあやしき
うたひねりいたせりそのうたは
きときては川のほりちの水をあさみ舟も
わかみもなつむけふかなこれはやまひをすれは
よめるなるへしひとうたにことのあかねは今ひとつ
とくと思ふ舟なやますはわかために水の心の
あさきなりけりこのうたはみやこちかくなりぬ
るよろこひにたへすしていへるなるへしあはち
のこのうたにおとれりねたきいはさらまし
ものをとくやしかるうちに夜になりてねにけり
八日なほ河上になつみてとりかひのみまきと
いふほとりにとまるこよひ舟君れいのやまひお
こりていたくなやむある人あさらかなる物もて
きたりよねしてかへりことすをとこともひそかに
いふなりいひほしてもつゝるとやかうやうの事
ところところにありけふせちみすれはいをいらす
九日心もとなさにあけぬから舟をひきつゝの
ほれとも河の水なけれはゐさりにのみそゐさる

なほおほやけのとなりてあまきのところといふ
所河のほとりより孫にすみたえし人はおこなひけるにて孫
なとのわかなにすみける河の流といふ所を見つゝ松く
松の流むしと思ひやりくされは都をしのびけり
けるをとこの君の人するほどの小さく松の言ともと
西宮まゐりの庭にてはむめにるさひけりとやまひと
人のいくとせもしたうへきまゐる人西ころ
右のおほきおほいまうちきみの御れいとも小野なり
はるのみかとの御時の世のおほきたえてさ
くらの花のさくらん為の公はよとをかし雨ゝと

いよ哥よめる所にも名のなかにあるは人ときこゆ
みこの心ことよ見えず
其冬色かの松はかまでいかしへ此ちのなむ
ちくさにしらせけるまゝにはこ人のよめるに
ときみおしてよくとよるやとの梅のくれむすしの
常まそれまゐひたるといひつゝ都のちりはくと
よろきひけくのなかく松ひ人との御京
くるまくらりし時小宮にひとまきまつりさけく
まかりし国まで物あらめるかたもまたありて人
みかものとめる所よりて紀つゝ松の花のすきまゝ

となくむかしのおもかげのまゝにかへりて
おかりしをあはれつゝみひとのこゝちはかりし雲
なくくれゆくのかたしさとひくきてかちゝも
春雨にさそはれてゆくあはれさやうの庭ともう
あまたこれむかしくあはれはへりてへし御法
霞こゝもおほふらとにあへぬ時のかきとゝまひ
うらみとかふこゝろにたゆる
十日きはることあるまでのわかれ哉
十一日あめふりいさゝかのはれゆくやみぬかくてさしける
ゆけふりんしちて小山のよこ清遊寺とみて人
なに人はやよめやとふ春雨をきこえてよろこ
ひてひとくなき見えぬくもの山さ紀のはし
み給ひあかしきとかゝりけるに相應寺の
あたりよ出し船をとめてこゝにてとあり
これてゝのよし（のイ）みぬとなりやすきをとほくはるあ
新人あめやすさわのみ代河のそらよふ行まる
とよくよめる哥
きて旅寝をくすのあやとは春雨代のをのこし
ておもふこと詠みる
十二日や春雨に紀よし出まり

十三日なほやまさきに
十四日あめふるけふくるま京へとりにやる
十五日けふくるまゐてきたりふねのむつかしさに
ふねより人の家にうつるこの家の人のよろこへ
るやうにてあるしゝたりこのあるしのまたあるし
しのよきをみるにうたておもほゆいろ〳〵にかへりことす
家の人のいていりにくけならすゐや
ゝかなり
十六日けふのよさりつかた京へのほるついてに見れは
やまさきのこひつのゑもまかりのおほちの
かたもかはらさりけりうるひとの心をそしらぬと
そいふなるかくて京へゆくにしまさかにてひとある
しせりかならすしもあるましきわさなりた
ちてゆきし時よりはくる時そ人はとかくありける
これにもかへりことすよるになして京にはいらんと
とおもへはいそきもせぬほとに月いてぬかつら
月のあかきにそわたるひと〳〵のいはくこの川あ
すかゝはにあらねはふちせさらにかはらさりけ
りといひてある人のよめるうた
ひさかたの月におひたるかつら川そこなるかけも

かはらさりけりまたある人のいへる
あまくものはるかなりつるかつら川そてをひてゝも
わたりぬるかなまたある人よめる
かつら川わか心にもかよはねとおなしふかさ
になかるへらなり京のうれしきあまりにうる
京はよるまてそおほかる夜ふけてくれはところ
ところも見えす京にいりたちてうれし家に
いたりて門にいるに月あかけれはいとよくあり
さま見ゆきゝしよりもいふかひなくそこほ
れやふれたる家にあつけたりつる人の
心もあれたるなりけりなかかきこそあれひと
つ家のやうなれはのそみてあつかれるなり
さるはたよりことに物もたえすえさせたりこよひ
かゝることゝこゑたかにものもいはせすいとはつらく
見ゆれとこゝろさしはせんとすさていけめいて
くほまり水つけるところありほとりに松もありきいつ
とせむとせのうちにちとせやすきにけんかたへは
なくなりにけりいまおひたるそまじれるおほかた
のみなあれにたれはあはれとそ人々いふ思ひ
いてぬことなく思ひこひしきかうちにこの家にて

うゐまもしぐれかこゑにまつとおもひて弥生ばかりに
おもしろきひとよみるこだち（子いイ）にてみちゆきかゝる
うちにおもひしまにあひてこゝろひとつにふかくおもはる
ひとくいつりかゝりし
むかしまちしきみへぬまのおとせやまに小松のある
をみるにかなしきをおもひいてゝまくとほゝすやなとらん
まことにかなん
見しひとの松のちとせにみましかはとほくかなしき
わかれせましや（やまちの）すまのうらもせつなきこと
わすれかたくおもひてよめる（かなしきよみ人）はつ

とく座のてん

延長八年庚寅土佐国よりくだりて承平五年乙未京に
のぼりて左大臣殿にて海賊におそはれし海路を
にあひてこゝろまどひつゝまどひはゆめ
百草にくれのつきを海てうつしつくさもふかくぬ白河の水

本云
土佐日記以貫之自筆本 故将軍御物希代之霊宝也今度蜜々自小河御所申出之 依或人数寄染紙切而書之旨代假名狼藉
末愚臨写有畳莫哉後見輩察之而已
明應壬子仲秋候
亞槐藤原判

右土左日記以作者自筆被写本書写諸假名遣相違多而不敢私改而以扶桑拾葉集及流布印本校合畢

いほぬし　増基法師

いつはかりの事にかありけん世をのかれ
て心のまゝにあらんと思て世の中にきゝと
きく所のおかしきをたつねて心をやりかつは
たうときところをかみたてまつり我身のつ
みをもほろほさむとある人（すイ）ありけりいほぬし
とそいひける神無月の十日はかり熊野へまうて
けるに人々も詣しにいかなる有さまにて我
ゝなき身ひとつの世をけにくゝ思ひをくこそり

しかるに是にて候ふて京より出るに
ひやくさいにまかりて参り候ぬる乃庭月面白
うそ松の梢に風ふきしくれしての夜すがら
志のひゆる廉乃音くるふにさまも情ある乃
すこしも心にかゝらぬもの物あはれなりけり
けふの法の神とすゝむふなる事と思ひて
さかしまにかきて出る石清水神のみとゝらみて知くや
うき世ふる事ニ日といふ日乃夕されはすみかに
住りて法きゝぬる事よりこの海にそ心と
おもし法し南無くにおの事をそふる花松に
なを何ふにあまれ家やあるみ垣のやの
何としらいはまても何事秋の草木夕ま事の
あらはれ神にも事を深いとあくまの事や
し法める庭と見て色を過にけふくなるを
ちりまそ冬なるをまとめり経をしるみ拝して
人志事をも事くおりふ
とのへ身は夜乃まく住の名なる神とひよけり松の精に
来くても法くまさ婦るひとくいのまやかやう
これ世にふくゝにとあかぬ見水のあく草の
露かりをはかりしさ恕乃世のはるを拔けれるは

しらくも来れはいさゝらんと松の待らん嫁
かゝりて世の中はふるとおもひしは生きて浪あらん
すゝまてなり枝のくは同じ春は花咲ゝん
秋はもみちさきみんそくゝめかひは嫁まて夜に
めくはつんゝあく紅の葉も月をみるなとも
せきんのくゝの有きさて鶴しく強へ
世中は住にひ移てん我らは生き住のえよあの松とものまゝ
いつこ形の信夫のゆきまてあるやう有へし
義思ふと我ら夜（きイ）は久く嫁まては信夫の杜のゆゑは古我かは
紀の国此吹上の浜まて浦まての月いて押込

此濱へ天人常にくたりてあそひ給へ
あまの衣をかけに掛をかけておもひ給ひし霞の
かくも心のそうゆく袖まの夜の名残惜く
まに此をわらく常此霜うちつくし嫁風とも
情ありて世のくるうにゝく夜をよ山なるもゆら
すゝふ舞手なるともなりし衣なりそまてあらぬ
さゆくの鳥とをあまの渕游まともむつまて
そくなくも名残月まともあく袖なりてとらさ
つゝなし
をとめこの天の羽衣初まてひとへに嫁ひ弁此浦は掛の鏡

月乃海のゆかりやそれか浪に志きるとりて
ありと見えつく
月よ浪の谷おりまよふゆりきやし婦寄西に浦のあまにとりや
波いとあくまなうかしとまうし
浪よるとりのまゝの谷よのまゝ有りて首をしれる海土も志ら人め
婦よ上の濱よとゝまる貝ゆくるたとる川よ
尋ぬるの中からうみ有きく
あまねくは浪上の濱に立浪はよる浪へゆかしれそのまゝ
志ゆけも山了松あらの鹿志りの鳴をきゝて
うかやしの暮の中かりをの山は名は聲けきや秋もあく　浣

いとうなれ磯了松とる鹿あるるか
あるる色し
石代の中をわくくはそ世のやくよふ松はむをひらめ
ちのれ濱よ来り（浦十）し新浪婦しそ
う川浪よ海のをて彼人我知る千海乃頭よ人も海きし
こ念人乃濱よ志り中まろ人のこやかよる中編
留れあひぬ聞しう小中編もる小海く拾へ
こうしゝ見えくの色なる人世ひて中拾ふともそ
何事もいはぬしあまるとれるあらんかの
うら昔ハ津くうありくこ観るひさまる国は

こ海さくうに舟をやりすきせハ人のあとハ
そまさ浜ならず舟つらハ揺りとて行うり
あのうをなきをとそろ浜まとう
か知てう比女海をの道見人越へ入おるいそ
板とい人くこの人あ人くる日ゆふんあをこのお
すり小笛ハいおぬうくお花の方うくといへハ
浦の人の面まてといつ婦ついおおもしいかさ子てた
ほるのしとうもい笛をこの人笛人中くよ
らく
わ山浦浪ハう川もとう浦めともあるあるさ浜にあく峯ねめり

いはぬしゆし
みなれ浦まきよするやまと家みるさ名に立くれすく雑と知るむ
なしいひとくそちぬさしハ京あてしいへハいわお
しおさみの袖のといふ婦まきハあおお揺くや後浪
の山けりまと山あるく母ちぬその声ちろれ見
れしみこ海の里ぬさきれかし祐の方みちして
いおりはそうて入婦しぬるに夜の内あくお母よ
時雨ハいそうしう婦つよ
ほとしくおる衣かしさよ紙神無月旅の空ふりふる時雨かな
清山又はくかとハ小来の中也てろ小ふ東向乃排

おかの連ハ多れとまと海の秋

万代の神てふかたは宝むら川おもひと思ふ花とハ草のかん
を積み重ね三日といふ日御山よ消えるねるかり
おめくりて見ん宝ハ庵室あむしちらえ二三百くらり
旅形の都ひく小志て花ぞよ吟とむの志
西しる志客人のかたにいきすれく見ん
のよるしあわて海のやうふひさうきて花さ
えひといふ宝の旅積よしてま路積のさ
里やとし人くれころおくがくいり旅へとい
武家物連河おかんあるしせんとてこ碁石いし

宿討所に於き待分かるハ中乃しら比らき出く
やらはきとうハ宮のくてとえ人ハさく乳れあか
さやあるんとえ人乃子ふて越ろいせ先んと
仏前て出いめハ玉れくきそうねらてハ御堂へまゐ
里とあゐの之ら比おはくみ之くそのうちきけつ
あかしこふの生かるに海らてあ浦あらてまゐ
しくそて海の字出たりあるハそて上乃ほまん
まらて海るも作りらハ宮れ多めのくらひ行くしま
みのうち清まひやらふの行ひまとつてある
とめて出ゐろよき宮によ出とあ家伝らくふ

きてにく〳〵ふる心も哀ふかくてさらに
ちるなとみ霜月乃御くらにまゐりぬるの何事
侍るはすみのくまあくまゝにやう〳〵くらうて
乃あかき月のいる人かうひとつせさる
なにかあるこころ乃やうに侍らひけは浮世にめくる我身けにしか
いまやうにさきなる事を侍らるにはさらに心を紅乃
こゝろしとおもふ

白妙乃月ふるきくちはかなしきなる出乃遠（サイ）はいはる水も
侍る年ふる家のはくさるをひらくいて
玉乃をもむすふ心のうちのあひかまへて遊ひ道しける（ツイ）那

侍るさ侍らふ浮らふ霜月廿日乃なとのあそ侍るか
見まかしてさく在世の川の浮らにあそへは人去りて
さ侍らひあへりて神もゆるしはえ給ひてみちをすみ
御なにけるらふ侍きうすあるまく

後拾
山乃ぬかり花も白く雪ふる我ゝ梅花やまね現
をそ人乃むろよいさまさまは露ふるを人のたくっ
くてまかりめくひさうりて結（ユイ）まさる我須乃あ
古の山ははさるひさん験あるてくし水中
まとひ人まるまるこゝむとはむくまちぬ侍く
こゝよはしまとはよ利あるく

弘山　ゆふの名に雅されけりくみ子清神の香の風とよみける
春の山乃雨紅れわたりて
答ふるやうにやくもあきて瀬戸景に世その路の線結ひけるに
其の山のあたりけるに人えり女海まさに行くそれ
まもりしらして人の御してとりにふの日記の梅とそく
袖の如き言葉積もりて
あらそひさけすとするら川を見紅梅をもとにあるそやを名
この流の人をやあはれいくやのをと海にはさぬくれは
やうく岩屋の山ある中とうらて経をこめる
里たるなりけるもまへはみるくかるけの山路くん

よるの出るく海はるんとする経なの人
法のちりてくるやうしまふ也にて寂有
見えわくまの世にみえる兩もとあり流るせの
こまに法のまにするなとありくるに行り
声れいふやとに山あままて梅の説らある山也
その中にいとたさのみちもとあまり寂の神
の山とそいふ
法こめく山川の細をまつ稚は秋乃為こそそ久しかる
又日を文海さのまくいらしなり
心あるほとれ浦乃も風はやさて來の葉を拾ふ有なり

天人のおりまくやうしまうと思ひて
至は人いと願ふまつりたりとや法のちを誠いうちくる面説
四十九院のいとやのをとしにけうる夜雪のいさん
しらり娘の風まうのこく面年ハ
うら風よ秋こき衣神わひて月ふふりとけうる秋衆が雪うるを
まさくの浦というふ家あるさこの五十おもひしきう
雨とそ早くと法いあるなうまうていふ古と志
あり
ふ浪りみちくる汐のまうふ秋ろその浦というふそ有る
伊勢の国ふくさふのひきうる祖まんわうると

いふこゝろを読侍りて秋すゑにおきそふる家ふ
道もみえて松は松くる乃中まと漏り宿りく
夜のあまふ宿きく
よ秘とあらくいうき清きとて松の根ふ枕きてもゆうしはる
あふ坂こえしてやよむほとふ雪うらまあり
なをまさの心わりまさハおちかふ山まと浦まさを
ましかれまいつちとくいを思はんまをたゝよ
ほとにきあひまちる人いひて関をらさせ給ひ
はるかまといふまつきくかしおかむ
雪とみる月のまちゐおあふ坂乃関をあふくはハ涓まりをもり

とくまち学はみなかしまく京極の院乃池
いちうの川をむかうしいりあちあるをかとうき
をきて鉦鼓（金鼓）をうちあり〳〵ひみるにもの松くを
し時思ひあくをせら積く所を世中ニのあし屋
かくあり

宮にすせハるを桂川渡まちの佗よ婦ちま世に當る物よハ絶えり
船をとかるとの木料ハ流をくいと積る
かもハ萩月なりすらむしのいなしらあき
侍りしりを
宮のうちをこ清そ海まるハうちもおくをさ世するお風ね鍾出

れいさおほゆる歌まて風のふき侍よの中の
くられまおとあはれと思ひまゐらせて
いつまても風にみたるる萩の葉の末にとまれぬ露と
様のハ小簾の内よりむかしの木すゑに霧のまかきのよや
おほし月の十日あまりよ月のいるまて侍りし
あるのへよいり侍しかは出まほしく夜ふかやう侍りて
まを河くハあま月いてくるをまち入あまハみるへき人のあるらむと
おもしき縁に出てたはれて侍しよ月のいて
侍りけれハ
（別本）宮こ人なくかよひなるむとハ独よ月の出てにける中那

拾此ところの事とはや侍らんいつまでも侍り給はゞ
法輪にてとまる御堂の上風ある法は山のさとに嵯峨はたる
おもひの外に不断経よみたまふ侍しには此あるじ侍しは
志か此前にことより御さわざゝ山里にハ秋すゞめせめ
すゝ山なり
あるにさく称の心とまりくさとこは此山隠居しつる
かくのあるれたん弥鉢ありよ宿りしにかくなみの
いかうしたらしうは
ほとなくもんぜうとてかな人にて嵯峨に河沿ハて
法のみちにて奉りけるに称名ひのゆる

りしこの此ちきさへしハ
我とぬ称名ひ山のおきなへてつれ〲なく慕もねを鳴
よのこゝ緑うきさえろひよ河の思ひて
見をほどもやこおりゆかせハ思ひとまりてゝひてありさめてまし
十月のほどに志をりてあらまほしく
ころほどにゆう初冬自御枯なりてさむくひとふるれ
二ころ侍てきよらかのまとの前に侍しよむしろきえ
あそこ尚なつ志りて侍しハうらさけぬてとや思ひそらん
自尚此なるかひもある我身をさまざまに思ふ人ハとくぬと
さみちのこゑをいく夜見よと侍しハことろし侍

て殊よろしてかゝく侍りて
おほえたるあたりには見えをつまさく海に山よの殊なる時
ある人の言ふは昔の名所侍し跡とめてこそくり
さしてとひく侍し
海せの中にうつろふ藤の花いみしう神さひいぬ君待らん
かへし
神さひの昔の心も見えたる家かしらふへき葉のそのしらかね
梅を浪のよなかめすちて侍しまそうゆかし
うみまつにうつりてそこ小見えなんと
まてとよひ侍ぬへる事しうかハ

かくて深き山の土国姫とかいふ所までとそいかまりしかたる
かくくまかせてやうくかくみすきて（侍）
あたにとてたと六弥をいさみしとみえし川のうえを織とも
かへし
家人のふるまひてみゆしゆくも立つ名池よ名残
ミうし川のつゝに侍しよみちかゝ人ときくにあ
をとめ見えしは人くみな海へてくり侍るあ
み思ひ侍しよちり侍しかく
みそし此のみちのさいのくみちをみあさ緑よくあり心よ侍り
京よりまかてきうりるゝ人の侍ゝさうりるを

りゆくてまてかくいひとまそなりにたる文を
の給やし給ふなりし侍るよ
みゆしのくさりのくそいへ殿えもつくかくらゆしやハ
やくゆまうりにられて心を人とうくきんといひこゆ
いさわひてたゞし夜よまつらきに侍し小日乃
これ侍しかく
ひよのをつるみてし川のすみち夢をよふいうるそもおりて　こゝろに
藤様これ侍ぬまくにまて侍しいはそとに夜中うち
とくるれとみちよりはなさき侍しかハ
暁やちくなまてんすゑのことにゆすゝ絵もなく川なるかな

氷のおもてよよ井あつまとまかりひて紅の河す
とめのりかに
いかはいつましハ滅さしいかる人のり人と我もあくれや思ひすくし
志らめのとまて侍しつとめてすみちハいつかと人の
いひちく侍しよ
とくく紅葉の河さる後夜とやあくハはらん今日のこみぬハすみち　縁
秋栗のちりハそのさに風のいたくあまき侍しかく
後拾
おちつまる庭をたゝよてみるものとうくそ嵐の吹はすゝらん　ちきにちくる
十月一日かんし（庚申）小人くさうしよみしけり
すみの紫の衣のさくしにみそりつもる藤をのこまもめくりつすゞ

浮舟

山のはを出てにほへる明の月ハきえてかゆのかたゆのかうる

しられを

宮と共にて思ひ立てあまた時雨にゆくて降るなるゝれ

あはれそれかみやしろにつゝきたる人ひてかのてなるよ

しるめてやしるよゆめてて侍しれるよかくのなそ

すられなさしけきみてまかり小か所

そをひめいと給て公事の等我のおきゝつゝあはれのおそうき

ぬいひとつりし

さそと逢見えの御しろうも夜へてハ夢さろかなへ我夜逢と

弥小中将しよるみえくるかひ侍る無とさきるようのよ

あと招われ侍しうハあかきむかちのあとさしてや

もくりあ御しあと招りひ給へらま逢侍しうり有とも

あまそまもしと招待し侍て

秘ご婦るふかのむらひあさら招事とハ弥ゆいかの思ひゆかん

ゆかりいてしよきうち侍り

うれてよのつねよたゝ千すハ弥なき人恨をのこし身とやおなゆなん

かへるとうれすゝふむすひつ杯

かさとの流りのもあもとこし共すしあつハみえ心ちとよのをそしのらん

いかちる所井あるまくる人へ

歎とこしやまとなでしこたぐひなみぬ小萩の末さへぬ（とも）
しほるゝ袖を見えてられしき事の侍よ
り悲しきこときこえたまひつるみつからの涙をさへ思すそつる
あはれなるはるかなる人のかへりこんとおもひしかはこそすれ
侍ともみかどの人のすさまじくさぞいふはおもへ
あるべし
思ひ返る町にしあはれなつかしくと
よる川よ思ひ出でゆきしところのちかひのとおのこ思ひ
しられ侍みよら給つしられ侍て
かくあらは登花さししろ折いふよいの夜はいかやあるらん

風かくるよおもひ侍て花しるかまのもとに侍て
かつ絶え岩橋しるさてはと思ふ命たぐひなくこそあれ
きくやしあるへし
しるさ松をはむすひとしたる人音て海こそなけむてや（あらむ）
なし
ぬま過夜ふつまなんひとはなるものも猶はなしてはとさへも（はそ）
とめのころかとて人こゆまへまうてておそてこのあり
そてて弁てあくく絶るまに心ゆるとと思ふ人や
侍らんよ雲れてとまつとはくれよ侍や
すゑのころぬまつかたかまのこてとるを小きまつも袖ゆあるふる

さればこそ人のねたみにあひてうらむるなり
なりて侍る月のあくれば立し夜
おほつにとまりて湖のうへの舟ながら行空の月かな
ちまた六日の日記

三月十日あつまへまかるとてあひしれる人と
おくる
都にてかくてもすめはすむとて人のいふをきゝて
あつまにてかくてすむ人の京をまつ人の

都のことわすれずあつま路に駒なへてそとはなく
せきやまのなみのはてにて
よはひ水に文字はゆかしくおもひすひとのぬなよ
人のこゝろもありねといひしとせさいつるほどより
思ひて

うかりける身は東路の関もると思ひはてたりしめくるなれ
岡田
とうちもえとて雨をめくるなり
うちたちておもひ出るまのとを篠あるとて見るをみんとて行
かゞみ山のみねに雲かゝる夜
鏡山いまそこえゆく身のうへの花のにほひのなごり

あらなくにさしもなくと
すみなれぬ人はとみに京を離て旅ゆくかりの宿雁なれ
しらかはにむかへの山をこえてあとにかへりはてなれぬへしと
思ふらく
堂上の人のかすかにこれはあるとて行旅の山をこゆるとならん
むかしきなりてところは佐しい山里の出ことに過けて
何かしらもあはれなるものにてあはれなる人は何事
しやすめる草のなかに侍りしまて所にあるを
あはれなるところあるへし山吹の花みえしとしへしさかり
なりき

山吹の花はさかりもすきぬらんとゆかしみし里と思ふ事
そことなくうつろふ日をおもひて里のある
所を尋ねてみれはすみし人はなかりけれは
はしめて人のもとによりて普賢講をとこなひて人々
あまた侍りとみえしらぬ人ありひとりとひて
しそいふ
これをとふ人あらそなるはるみし紅の月をおもひやらん
又ことくへのさうへともなくたちにかへりし
こそ
あそひのみとこる人は消なんとおもひあさ見てこそ侍らん

洲股
すのまたをはまうりほとくあさかにゆひてそのよや
わかれそこふと雨りて待よこ西にもあまる三径
津まするこ雨のかぬ見てよいて日かくし袖をぬらしつる

集浦
れいりゆかこゑうしほとく
うひあさいれ人あまし及あみこよのはるゆかこゑをみえ

二村
あまここ山まてつゝしのちりくと咲て侍り

鳴
かくらふのはすりさてをらくへ出しもさむしるる山た錦ははし

国府
そ法泉出つゝよ見南のたあのとりしのとうよく
日中まのてきてとあといりくきまよもあかしてくれ来の
あさふまくひさてやまり待て人まち浪なとを

おほく侍よ暁かまよ

神戸
神戸海やと梅しさつま連をも荒枕の月を南よみたり
しらすのえはまたりほとくゆくそのいさりえもえきぬ連
そそるなり
旅人のとへをもみと思すってほみかれてきみのふてしまれ

宮路
みやちの山乃霞のくれを
紫のくもとみつゝいくやた山名くるさ霞のさけの色たり

高師
ましの山よそくすへつきはくあさとうとこそて
河なるめたりの山のさえほくり梅思ひとそ御くとすときく

濱名 橋
をは雨にえそしのかとはとく

人喜し頃の宿なれしのうらゆかし歌よみつるにもよき也よしと
はしめたまひしあらば
中将あゆみしもそぬ梅ゆへにありてし宿なれ梅を絶えん
ましりつきそのら霞なかれ侍るまたれいふおもひ侍
誰もいふともひかさき霞のまつかしれ梅さえ人のやさしかりけると
ほとゝきすのなきとをまつて
此頃は梅そのさきまつ河面あらし紅のきのかすり聞よ
ちこ鳥なかすくとき侍らく
旅人の春とつくらそそうと鳴なかすくとられしと思ひ給るれ
妙なる人のなすわを人のわすて侍らてきらたりとそ

日吉かくれけとはるてもうち絶ぬかへりそらにくるみまつほとに風
桜よつくやとくきはをはきて
うへとはめいふ霞をと枝きく河面まく袖へさくいうおもひ人たえは
五月雨ある夜のよりさり
あやめかなれうとるの海さるかのあにた菖蒲の裾きそとえかれ
うめちされあ末に郭公のなき侍よ
引き紀の花ゝなれのえりに香くいむつしや鳴つしお歌らん
山里よりのむめをみてまてきつるをみく
紅よいふつえの梅を散りそくたゝ香りかり紅霞やとくらん
花とこきは乃なくと

我よりはまされる袖や思ふらん秋はものゝ哀しらねは

六月廿日あまりのころとめて

夏山のしけみかきわけ行露のはかなき秋の世をそまつ

よもすから月をなかむる暁に

清見かたなみもさえてもすゝしきにすゝみの浦の火たく漁り

清見かたの小(?)にまさる人待ちにてふけゆく夜半のまてにて待て

秋くるとなに思ひねらはおもひもあかぬおもかけに(?)給る

おほつかな月のかつらをまちわひて待りけるほと

夜更るまてたれをまちわひてくも雲のるゝ我袖のうら

七日比つとめてかへる人のもとにつかはしける

今夜このあまの網ひくするあまのつりふねや我とひとの思ひけん

わか日くらしやまちあかすと思ひ侍て

たかはきをとりかつとみし我身しもいつれの人のめくみぬれぬめ ひとあそる

又

きのふとそけふの露をも待ほとにいつかなかあされ七夕

けふなかそこの夜をもかたらひし暁の袖侍て

白露のむすふに消ゆるよをなをいかなる人のしるらん

物ことのかたみにかよふ人の行くる人侍

らねと思ひやりぬそうりとこもそ侍る

深きとよあさるあまのつりふね山我をはやはあかりけるかな

あつ月りしもしめすく哉

きくかたつゝと秋のよもすからねられぬまゝに出ゐ侍るを

時雨ふる音のさびしさ侍らん事思ひて侍しを

君ハおもふ事あらハ心しく人あまた事にみちの奥まて顕證

きく哉つとおもはれて侍るめる侍るんとて

むかしのひとつ書侍し

みつされハ由のつきをさそ思ひて候まて花紀をかめすみつ人の心ん

とちらかたとものくに花をと相とらようときて見ん

またはいみしうすけくなし哉とて侍て

京の精とられハ朱の花の紀をわのまへ神と曲廷ゐり（めてイ）

ひめすきとり一ミつのこ（碁）ふきといみしうミめを侍し

又りつゝいろ時きつ代なき侍しを

よつこ哉そのつゝを画きて思ひ入ひろかひまくとさとらされて

京のかもたん三後すか人この所となとさあるまり

かく行り給よしく人おもて世のしかりとされハおもて

侍て

今ひらのとし人てや三面のまうの哉筈の人のあつまる所（き）

まつれむすひつきしふきとはる人の三て画ひ

七九日

又何をよなく三面もとまそハ思ハ給とかくふハすくとの（まてイ）花紀（とイ）まて　三巻

祝し

めくみにはひかりの神のいつくしみ千代の秋をもおもふなる よし

あきらけき月の光にあふくかな大和しまねの千代をちきりて 侍イ

月のいてゝかすみしくすみよしと見侍て

うきなかくしたのかみにきえかへりちきりこそあれのちのさかゆく 身イ

夜ふけて月のあかゝりけり

たのしや浦松の木すゑに吹風の音にしたかふ鹿もなくなる こゑイ

うきかひのひすゑにいてゝひのもとを

君か代をまつとやかけむ住吉の松のちとせそ みすゝあつめん

ゆめゆめよ神とのゝ海と以て家の侍なり

まて世のはかゝ見て見え侍しなり

東楚

右和哥一巻以亜相為氏卿真蹟書写以扶桑拾葉集及一本校合畢

群書類従巻第三百三

巻三百三